

東西古匱金石展觀列品中の

一二三に就きて

— 佛教美術研究上より見たる —

石 崎 達 二

大阪の山中商會が大阪美術俱樂部に於いて行つた佛像其他の古美術品の展觀はその蒐集が猶太、希臘、印度、ガンダラ、中央アジア、シヤム、カンボヂヤ、支那等に涉り、最近に於ける佛教美術研究上の一大收穫であつた。此の列品の大部分は既に松本博士、濱田博士、源豐宗氏、三浦芳之助氏の解説を附して「東西古匱金石集」として刊行されてゐる。

而して此の展觀中佛像が最も多數を占めてゐる、それで自分の如く未だ印度支那その他の地を履まず、只常に寫眞に依つて古代の佛教美術の研究に従事してゐるものにとつては實に多年の渴望を醫するものであつた。今こゝにこの展觀列品中の二三に就き氣付いた事を記して見やう。

シヤムの佛像も面白かつたがカムボヂヤの佛像は非常に珍らしかつた。東甫塞カンボヂヤの石佛に就いて

東西古匱金石展觀列品中の二三に就きて

ては大正十一年八月號の中央美術に本間武彦氏が「クメエルの印度式彫刻」といふ題で書かれた事があるので、當時からある期待を持つてゐたが、今度初めてその佛像を見た。シヤムの系統と略同じであるが、幾分異つた郷土色ローカルカラーが出てゐてその面相に民族的特徴を有し、シヤムの佛像の様に千遍一律、しかも何か型に倣つた所があるのとは異つてゐる所に興味を感じた。龍王の像が四、五點もあつたが、これはガンダラ美術によくあるもので親しみ深いものであるが、今度のガンダラ將來品には龍王の出てゐるのは一つ

もなく、反つて東甬塞カンボジアの佛像にそれを見るのは興味深い事であつた。きけば世界各國の美術館にもカムボヂヤの佛像は殆んどなくあつても二三に過ぎない相である。それを二十體程も一度に陳列してあるのだから溜飲が下るわけである。ガンダラ及印度の彫刻は今迄幾多の著書で親しみの多いものばかりであつたから、心ゆくばかり鑑賞する事が出来た。たゞ中央亞細亞トルキスタン將來と記されてゐた一見犍陀羅式の顯著な鍍金釋迦像一體は非常に珍らしい又尊重すべきものであつた。(東西古銅金石集二、四十五八圖)これは大村西崖氏の名著文那美術史彫塑編附圖第八百二十圖に見えてゐる故老田工學士舊藏のもので、その他に自分の知つてゐる類品では松本文三郎博士所藏のこれとは形の小さい支那の模造品がある位にすぎない。Von Le Coq 氏の“Tsotshao”第五十三圖に載する佛像は此れに類するものではないかと思はれるが、これよりもよほどガンダラ的である。松本博士はその著「佛教藝術とその人物」挿繪第六圖に先生所藏

の模品を出し、同著四十九頁にこの故花田氏舊藏の分と併せてそれに就いての意見を記してゐられる。それに依れば花田氏の像は支那西安附近より得られたものであるとの事であり、松本博士の像は發見地は分らないが、支那模造であることはその臺座に「造像九體」とある事に依つて明らかである、この事である。此の像を目録に中史亞細亞トルキエタンとしたのは勿論推測であつて、確實な證據があるわけではないのである。が、その發見地の不明なるは遺憾である。而して此の佛像が何故かく問題になるかといへば、其の様式がガンダラ式佛像と著しい一致を示してゐるばかりでなく、支那の六朝の佛像とも亦著しい類似點を持つてゐるので、かの支那六朝式佛像の系統問題引いては佛教東漸史に關する貴重な遺物であるからである。今此の支那六朝式佛像の系統問題をこゝに縷述する違はないが要するに西洋の學者例へばフーシェ、グリエンウエデル等又日本の大多數の學者が、支那六朝式を以てガンダラ形式の延長と見るに反

して、我松本博士は支那六朝式を以てガンダラに次いで、その影響の下に發達したる印度式マツラ派の延長と見らるのである。此の兩説は俄に何れとも決定する事の出来ない大問題であつて、而も、それが解決せられない限り、支那六朝式の系統は明らかにする事が出来ず、引いては我推古式佛像の系統も明らかにする事が出来ないものである。今日の所支那と朝鮮及び日本との様式上の關係はとに角一應我推古式を以て支那北魏式の發展變形と見る事になつてゐるがその本源たる支那六朝式が印度或はガンダラ及び中央亞細亞と如何なる關係に於いて系統づけられるかは重大なる問題である。本像は高さ十三時半、一見してその彫法様式形に於てガンダラ様の顯著なるに係はらず仔細に見る時はガンダラ様が可成り變形して來てゐる事を認めぬわけにはゆかぬのである。その光背は缺佚して見るに由ないが、頭髮、顔、全體の格好等にその變形の跡が見られる。殊に著しきはその衣端の重疊の皺文で普通ガンダラ式佛像の皺文は寫實的で

波形をなすのが常であるが（例へばグリエンウエーデルの印度佛教美術四十圖の梵天帝釋像等の衣端、それが形式化して同著な四十三圖の如くデグザグになれるものもあり）本像では明らかに、硬化してその衣端は二ケの菱形を豎に並べてゐるのである。全體として非常に鈍重で寫實味に乏しく、又頭髮の結び方及びその肩に懸れる髮端の如きもガンダラ様に類似のものはあるが全く同形と認められるものはない様である。

其他詳細に涉つてはこゝに記す違はないが、とに角ガンダラ様の變形であることは誰もが氣付く所であつて、その衣端の菱形の如きは支那六朝式佛像に於いては稍軟化して普通に見られる所で我推古朝の鳥式佛像の皺文の如きも亦ここにその起源を有するのである。本像が確に中央アデヤに造られたとすれば、それはまぎれもなくガンダラ式より支那六朝式への過渡様式であつて、更に諸種の類品の發掘を待つてガンダラ式より支那式への推移が跡づけられるかも知れ

ない。しかし乍らそこには今日の所諸種の想像が許されるのであつて、ガンダラ式が支那式に變形して行つた一つの變形の道があつたとするも猶、印度より直接支那造像の模本が古代に於いて將來されるといふ他の大きな道があつたといふ事も充分あり得る事である。遺物から見て例へば大同の石佛の如きは支那六朝佛像の先驅を爲すものであるが、その佛像はガンダラ式の變形と見るよりもむしろ印度系殊にマツラ派系統の變形と見る方が今の所妥當なる解釋の様である。松本博士所藏品中にはグッタ式佛像が支那に於いて模造されたものもある。(松本先生著支那の佛教遺物百五十六頁等) 自分は恐らく松本博士の言はるゝ如く文那六朝式は多くマツラ派系統の作家乃至模本より流出したものと思ふ一人であるが、本像の如きはガンダラ系統の佛像が變形して行つた跡を窺ふに足るべき重要な遺品である。

更に人物鳥獸を刻せる小亞細亞畫像石(東西古甸金石集二、第四十三圖)なるものはこれまた

珍奇な遺品である。人物の姿態も面白かつたが特に佛教美術研究上興味を感じたのはその人物の二がハート形の我推古式菩薩像に見る如き首飾を小さくした様な形のものゝ下端に十字の形せるメダル様の品を附けたものを持つてゐる事であつた。十字は附けてゐないが、ハート型の持物は印度及ガンダラの佛像にはあるのかも知れないがこれを持つものを寡聞にして未だ見ないに係はらず支那の六朝、唐の菩薩像は往々にして之れを持つてゐる。例へば、支那美術史彫塑編附圖二〇四、二〇五、二〇六、五一三、五一四、五一五、五八六、七三八圖に見るものはそれで、今回の展覽中にも東魏の天平三年の銘ある石三尊佛像の左りの脇侍はそれを持ち、また列品三六七番の觀音立像等もこれを持つてゐたこれが何であるか、また如何なる意味を有するものなるかに就いては俄に斷じ難いが、それが少くとも西方起源のものなる事は略々決してもよいかと思ふ。この畫像石に就いては猶種々問題もあるのであつて、中には象形文字と思はれ

る様な字も刻してあり、また人物の頭上には太陽を具象化したかと思はれる波斯式衣冠を被りその衣服は古代埃及の麻布人物圖等の着附と同じであつた。とに角學界の問題になるものであらうと思はれる。

其他にも注意すべき逸品があつたが割愛して支那唐六朝の佛像に就いて一言し度い。今回の展觀中臺座佛體共に大體完全に殘つてゐて（手足に缺佚はあつたが）見答へのある大作は直隸省臨城縣兩溝村藏佛寺舊藏黃花石觀音彩色大坐像二體であらう。その顔面、着衣に殘れる僅かな色彩から、その昔この像の絢爛たる美を想像する事が出來、そのポーズ、モドリエに爛熟喚發の唐時代を偲ぶ事が出來た。更に自分の趣味からであらうが首部だけの唐代の砂巖石佛の美しさにはすつかり參つた。時代は唐代中期を少し降るものかとも思はれるがそのモドリエの豊かさ、確かさ、寶冠のモチーフの大らかさ、又その眼の美しさ、ひきしまつた口、その下唇の稍肉感的に厚き全體に一點の弛みもなく、しか

もゆつたりとした大らかな印象、見れば見る程見飽かぬ眞に惚々とする佛像である。その大きな耳に近附き何事か囁いて見たい様な衝動をすら感じた。その華かな唇に僅かに殘れる紅の色はこれまた鮮かな紅で、その唇は將に何事をかひそやかに語り出さんとするものゝ如くである。少しく離れて見ると例へば爛熟せる處女のあじかな退屈と祕め湛められた美しい憂鬱ともいふ様なものが心にひたひたと感じられるのであつた。自分は此等の佛像を飽かず眺め入りつゝ我天平の佛教藝術をインスパイヤした靈泉にゆくりなくも觸れ得た様に思つたのである。

がしかしこゝではそれらを語るのが主ではない。北魏式薔花石四面佛像刻範（東西古匱金石集一、第五十八圖）はよくある型であるが、その四面佛龕にそれ〴〵それが何佛であるかを記銘してゐる點で重要である。即ち東は釋迦多寶であり、二佛併座し、西は西方無量尊であり、座像であるがその左手を左膝の上に置き藥壺の如きを載せてゐるのが變つてゐる。北は彌勒佛

とあり、立像で、南は定光如來とあり、立像である。我法隆寺壁畫が四佛淨土なるべきは古今目錄よりいふ所であるが、それが何淨土であるかについては先輩已に異論があり、當時の流布經典たる金光經所説の四佛淨土東方阿閼、西方無量壽、北方微妙聲、南方寶相ならんといふ説と當時の造像例に依つて東方藥師、西方阿彌陀、北方彌勒、南方釋迦ならんといふ説とが最も有力であるが何れも未だ決定を見ないのである。本佛龕造顯の四佛も諸種の經典を漁つて見たが當籤るものはない。

恐らく當時崇拜された諸尊を四面に別したにすぎない(但し彌陀は例外)のであらう。しかし經軌の明瞭なる規定のなかつた時代であるからかゝる造像例も其他の造像例と共に四佛淨土を決定すべき(參者資料たるを失ぬであらう。今は繁を避けて支那の他の造像例に就いては略する。

次に太昌元年の銘ある石三尊佛像は稍形の變つたもので、その中尊は或ひは道士の像にあら

ざるやの疑を存するのである。即ち頭冠は支那文官に見る如き衣冠で普通に見る佛像の如く髪を現はしてゐない。その面細長く六朝式たるは肯はれるが、全く佛教的色彩を帯びない。而もその胸以下は全く龍門等に見る佛像のそれと同じく、天衣も交叉し、殊に脇侍の二菩薩は我法隆寺金堂の釋迦脇侍日光月光等と等しく天衣を交叉して、その兩手は玉を握れるものゝ様である。而して、此の太昌なる年號は目錄には他の銘に就いての如く西曆紀元年數を當て籤めてなかつた。普通の年表には見當らない年號である。その銘記は粗刻で甚だ讀解に苦しむが、その台坐裏面に、

太昌元年歲□

子七月癸巳朔

未比丘淨法敬

像一區上爲皇

帝陵下及皇

太后七世父母所

生父母因緣天(春?)

界衆生國

とある。支那美術史彫塑編出す所の多數の同時代の金石銘の中にも同年號のものは唯一つで、(同書二四三頁)あるが、李兆洛の歴代紀元編(李氏五種第十冊所收)に依ると太昌なる年號は普通年表に永熙と稱する年號と同じ元年壬子であつた事が見わるから即ちこの太昌元年歲の下は確かに壬である事が知られ太昌元年とは西曆に當てると五百三十二年である事が知られるのである。

其他注意した佛像も多數にあるが、展觀目錄及前記の圖錄に銘ある事を記されなかつた列品で自分の調べて銘を寫したものがあから書き添へておこふ。

魏石陰刻獅子坐碑斷片(列品三三六)には「大魏中都孝□□□歲次乙巳六□□月卅日癸卯□□儀□龐定□□□八人等敬造——石像一區光天云々とあつた。これは勿論孝昌元乙巳年(△532)に當り前出の像銘等と共に北魏造像の最盛期である。斷片ではあるが此の獅子は中々氣

持のいゝ作であつた。かゝるものゝ時代を確定して置く事も必要な事であらう。其他年號はないが唐磚樹下說法(列品四二四)に太守王容墓像とあつたが、此の磚は中々氣持のいゝ大らかなモチーフでその面に残れる彩色も殆んど剝落してゐたけれども随分美しいものだつた様である。これ或は西曆前五、六世紀頃の希臘の伴葬品のレキトスに死者とその父母又は戀人、侍者、侍女等を描いたものを用ひた如く支那に於いてもかゝる磚を伴葬品に用ひたものではないかと思ふ。或は墓の上に立てたか又は墓穴中に置いたか何れかであらう。

次に熾惶發掘の寫經二部があつた。一は貞明六年の銘ある賢劫千佛名經の最後の殘闕で佛名の上に一々各その圖像を畫いた丁寧を極めたものであつた。(東西古匱金石集二、第五十二圖)一部は貞元十三年の銘あるもので、先年將來された十王經等に類するものであらうと思はれ、諸佛菩薩の圖彙を録し、その願文に「金光明菩薩千尊了生死經一部諸佛要集經一部諸德福田經

一部菩薩五十德行經一部」等を敬造する由が見
 えるから此等の經典を書寫圖畫したものゝ一で
 あるらしい。用帛八假帳とあるから随分あつた
 のであらうが、その最後の殘闕である。而して
 その畫僧の名が出てゐるから面白い。即ち

畫像西明寺沙門弘景

畫像沙門福德

畫像沙門至善

畫像沙門了眞

等四人の名が見える。當時の僧侶が彩筆をふる
 つた事が證據立てられ、又その畫像の頗る暢達
 (幾分の稚氣はあるが)である所から見てかの燉
 惶のペリオ氏の報告に見るが如き壁畫も之等の
 畫僧に依つて描かれたのではなからうかと云ふ
 推測も下し得るわけである。今迄多數燉惶發掘
 寫經が將來されてゐるが、そして又研究もされ
 てゐるが奥書に畫僧の名等を出したものはあま
 りなかつた様である。寡聞にしてその例を知ら
 ないが、此點から見ても珍らしい遺物である。
 此點等も今後學者の研究に俟つべきものであら

う。因みに先きの願文に出せる經典中諸佛要集
 經、諸德福田經は現存するもので前者は縮、方
 等、黃帙、一〇、二十六右—三十七左に納められ
 西晋月氏三藏竺法護の譯である。後者は縮、宿
 帙八、七四右—七六左に收められ西晋沙門法立
 法炬の共譯である。今之等の經典の内容を吟味
 して、その内容に合はして描かれたであらう繪
 畫を想像することも面白い事であるが、割愛し
 て後日に譲る事にする。

猶諸佛要集經は大谷光瑞伯將來中央亞細亞發
 掘古寫經中にも存したもので前出現存の譯の外
 に武周刊定衆經目錄四卷(結帙三、十七右)に依
 れば西晋惠帝の太康年間聶通眞の譯した諸佛要
 集經もあつた様である。今此の經法の載する所
 は經名のみで譯者も記さず、その内容は知るに
 由ないから何れの譯であるか明らかでない。諸
 佛要集經については松本博士の佛典の研究一の
 八頁以下に先生の該博なる研究が納められてあ
 るから詳細はその方へ譲つておく。其他の二經
 は闕譯でその内容を知るに由ないが、何れも當

時の佛典の研究には缺かす事の出来ないものであらう。猶前出賢劫千佛名經は現存する現在賢劫千佛名經(縮、方等、黃三、六七左―七三右)が之に當るかと思はれるがその何れの部を見てもこゝに出す佛名と一致する所はない。

これは開元拾遺では梁錄に附せられてゐるもので譯者不明であるが、松本先生の佛典の研究中熾幢發掘寫經の研究中にも之れに類すると思はれる經の斷篇が見えてゐる。(佛典の研究百五十二頁以下參照)しかしそれも此處のそれと一致する所はない。或ひは異譯であらうかとも思はれるが明らかでない。佛名經の研究も松本先生の佛典の研究中に詳しいからこゝでは略す。

最後に唐代宋代の壁畫斷片が數點あつた。實に我々には珍らしいもので、唐初の影響になる我法隆寺金堂の壁畫の如き筆力の冴へはないが暢達な筆、傳彩の妙を見る事が出來た。宋代の一が山西省出陽府絳縣大陰寺より將來されたと記す外、その發見場所を知る事が出來ないのは非常に遺憾であるが、或は支那西方のものもある

のではないかとも思はれた。而して宋時代の壁畫を宋代の繪畫が我鎌倉以降の藝術に影響する所の頗る多かつた事を思ひつゝ、眺めると、その感じは全く異なるものがある。これ恐らくは宋代初期のものらしく多分に唐代の餘韻をもつものがある爲めであると思はれる。しかし僅かに見ゆる山水等には既に宋畫に見られる傾向が發生してゐる。

以上添付いた二三を記したに止まるが、研究は實はこれからなのであるから間違ひや見落しや誤りもあらうと思ふ。御示教を得ば幸である。(一九二六・一一・一四稿)